

和牛肥育の1年 第5回

これからの肥育牛舎と肥育の仕上げ

嘉 寿 頼 栄

1、肥 育 牛 舎

いままでのべなかつた肥育牛舎について、ここで申して見たいと思います。先づ牛舎の一般的条件としては次のようなことが、考えられるのではないのでしょうか。

(1) 牛舎の位置ならびに地勢

牛舎は先づよく乾燥した土地で、しかも南または東南に面した、陽当たりと通風のよい所がよろしい。肥育牛は夏は涼しく、冬は暖かく保てるようにすることが大切です。

牛舎は省力的意味から申しまして、なるべく母屋に近い方が牛を観察するうえからいっても理想的です。(できれば独立肥育牛舎がよろしい)

(2) 牛房の広さは

昔からの考えとして理想肥育ならびに普通肥育牛舎では、やはり単房がよいとされています。この牛房は縦、横が9尺から12尺で天井は7~8尺くらいが適当とされていました。

しかし近代的な省力、多頭飼育の面からは繫留式(スタンション)かまたは、追込方式をとれば、1

頭当り1~1.2坪でも結構ですので、牛舎の面積が集約的に使えるわけです。この場合、牛の大きさがなるべく揃っていることが大切です。

(3) 床と尿溜について

床はコンクリートまたは三和土にし、後方に向かって傾斜が30分の1程度あるのがよいとされています。

尿溜は牛舎の外へ作り、そこへ尿が流れ込む

のがよいでしょう。逆に牛房内へ尿溜をしたり、牛房内へたまるようでしたら、アンモニアガスが牛房の内へこもりますから、当然肥育成績はよくありません。いままでは、特に寒い生産地の牛房は大抵が深厩になっておりまして、1~3尺くらい掘り下げてあります。これは非常に非衛生的で、牛のためにも悪く、肥育成績はよくありませんでした。

そこで最近考えられた牛舎が、次にあげますようなデンマーク式牛舎で、省力、多頭化の管理方式から申しまして、一番理想に近いと思われます。

この牛舎から考えられることは、去勢肥育の場合でも牛床の中ほどに尿がたまりませんから、常によく乾わき、しかも牛床の中にビニール、竹が入れてありますので、非常に暖かいということです。

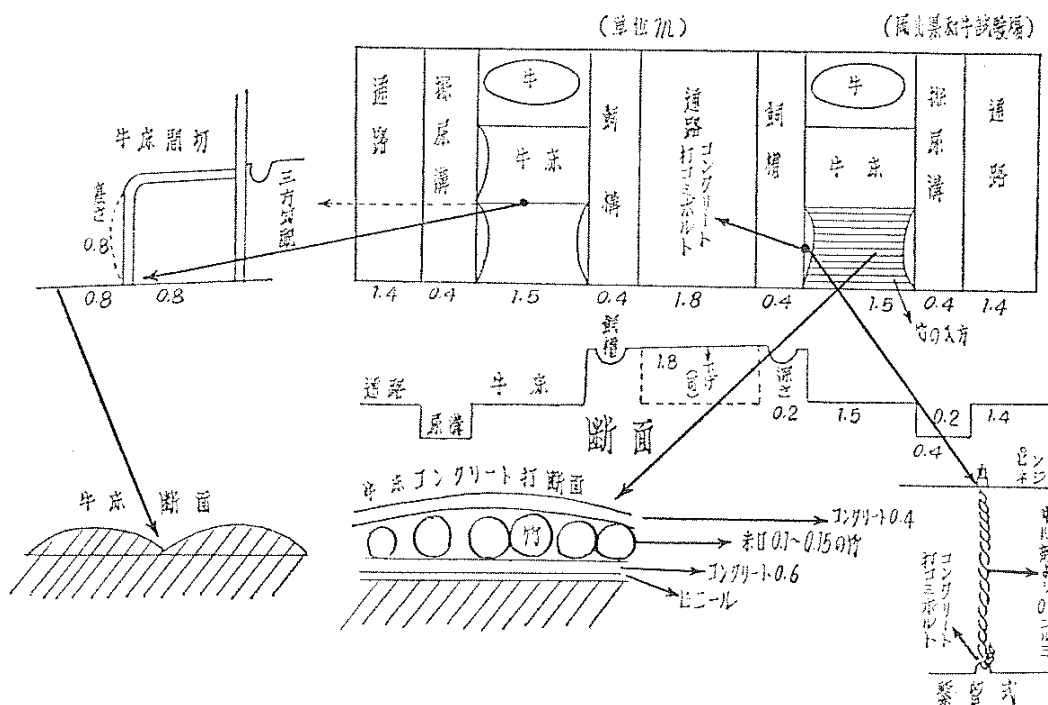
(4) 出入口と側壁

出入口は前と後ろ(または横)との2カ所にあつたほうが、飼養管理上よろしい。

(5) 飼槽ならびに給水器

飼槽も図に書いてあるような形がよいと思います。なおこれに2頭の牛の間に自動給水器(ウォーター

デンマーク式(繫留)肥育牛舎構造



岡山畜産便り 1964.10・11

カップまたは、サイホン式)があることがのぞましいでしょう。

サイホン式給水そう置とは、水源近くの貯水タンクのレベルと牛舎内の給水器のレベルを同じ高さになるようにしただけであまり手も掛けず、給水ができ、経費も少なくてすみます。

(6) 繋ぎ場または運動場

その牛舎の位置ならびに地勢にもよりますが、できるだけこれらの施設があった方がよろしい。その場合は夏は涼しいように果樹かなにかを植えて日蔭をし、冬は暖いようにしてあげれば、申し分ありません。運動は肥育初期で30分か1時間くらいで結構で、中・末期はその牛の食欲等に合わせて、1週間か10日に1回くらい出した方がよいでしょう。

2、肥育牛の仕上げ

いよいよ肥育は仕上げの時期になってまいりましたので、これらについてのべて見ましょう。

(1) 運動を制限して安静にする

肥育仕上げ期は肉質を改善する時期です。肉質をよくするには、栄養分の豊富な飼料をうんと食べさせることと、牛の運動を制限し安静に保つようにすることが大切です。運動をやめて安静に保てば増体も多くなりますが、それに加え肉質が非常によくなります。それではどのようにしたらよいであろうか。

肥育第1期と第2期とは毎日または隔日に、1日30～40分間の曳き運動か、運動場に出して運動した方がよいようです。できれば実行したいものですが、さもないと牛の食欲が悪くなって、そのために思うように増体しないからです。また長い期間ぜんぜん運動させないでおくと、非常に繋りの悪い肉を生産するからです。仕上げ期に入ってから運動をぐっと減らして1週間か10日に1回くらい、食欲が減退してくると軽く20～30分間ゆっくり曳き運動をした方が成績がよくなります。仕上げ期になると、糞や尿の排泄量も多くなるので、敷きわらの交換もできるだけしてやればそれだけよい成績が得られます。

安静にしてやるという意味から黒幕等を張り、室内を暗くしてやることも第3期などでは行いますが、暑い時期には通風が悪く、逆効果をきたしますので、注意せねばなりません。

(2) 食欲増進方法

食欲を増進させるためには、従来生飼いでやってきている場合は末期に煮飼いに直すのも1つのよい方法です。最近科学燃料が安く入手できるようになってからは、肥育牛の飼料を煮ることが経済的によい成績を得ている例がたくさんあり、この問題は今一度考えて見る必要があります。また末期には今までの飼料にあき、食べなくなりますので、例えば大麦を一部小麦に代えろとか、甘味のある甘藷を少しやるとか、消化効果のある家畜用かぶ(ジャスターゼ)があるためを少し与えるのも食欲を出す1つの方法です。

(3) 脂肪の多い飼料の給与を減すこと

脂肪の多い飼料はおおすぎると下痢をしたり、消化障害をおこします。肥育仕上げ期は、そうでなくとも胃腸障害を起したり、下痢をおこし易いので、脂肪の多い飼料を多給しないよう、特に注意しなければなりません。しかし米糠などが脂肪が多いからといって、少しもやらないと、かえって食欲を落すことになりますので、減量する程度がよいと思います。

(4) 給餌回数を増すこと

仕上げ期になると飼料の給与量が多くなり、残食が増えるようなことになりますので、今まで1日1回～2回給与のものも、できたら1回くらいふやして、夜飼いなどしてやるのがよいでしょう。

(5) 脂肪瘤や尾脇のすきをなおすこと

肥育が進むにつれ、体表に瘤の出るものがありますが、これは皮下脂肪が局部的に瘤のようにできるものです。これは素牛や飼い方にもよりますが、瘤の出る部位は、きまって肋の部、臀、肩、胸等があります。その内でも臀こぶが一番でやすいようです。これらは素牛購入時にそれらのおそれのある牛を購入しないことも1つの方法ですが、脂肪含量の多い飼料を過給しないことも大切です。これらは草履などで、摩擦することもよろしいが、余り効果はないようです。

またホルモン剤等をやり、尾脇のすいている牛がありますが、これらはできるだけ早い1期、2期等にホルモン剤投与を行ない、少なくとも仕上げ1ヵ月前には止めてやれば牛によって回復して来るものが

岡山畜産便り 1964.10・11

あります。このことは短期肥育の場合にはできませんが、食品衛生上からも考えねばならないことです。

(6) 下痢便に特に注意すること

仕上げ期になると、濃厚飼料を多く与えているので、どうしても糞が軟かくなります。仕上げ期に固い段ができていような糞をするようでは、まだ飼料が足りない証拠です。ようは流れない程度の軟便がよいのです。また下痢便はその形のみでなく、色や臭気に気をつけなければなりません。悪臭のひどい下痢便は一番いけないのです。下痢便をしたら、直ぐにその原因が何であるかを考えねばなりません。その程度によって、ひどければ、早期手当をしなければ、長い程肥育は台なしになってしまいます。

これは先般肥育経営事例の発表会で聞いた群馬県のある例ですが、この人は一度に30頭程度を、婦人1人で飼っていて非常によい成績をあげている人です。この人の日常管理のコツは、濃厚飼料は初期で1日1回、末期で2回くらいで粗飼料は常時給与ですが、糞かきを1日に、3回から4回行ない、その時、必ず糞の状態を見て翌日の飼料給与量を加減するという方法をとって、成績を上げているそうです。

が、全く当を得た方法だと感心しました。

(7) 仕上げの肉付

どの程度の肉付で、肥育を打切るのがよいかという事は、一律にはゆかないことで、素牛しだいで定めるべきでしょう。体型、資質のよい若い雌牛を長期肥育する場合には、満肉にすべきでしょう。2、3産くらい子牛をとった雌牛を肥育する場合には、満肉に少し足りない程度がよろしい。つまり9合肉か9合半程度といったところです。老廃牛の肥育の場合には、8合肉で打切るべきでしょう。2才から3才ぐらいの去勢牛では、8合半程度が経済的であり、3～4才の去勢牛では、8合半～9合程度まで肥育された方がよいでしょう。

以上は大体の肉付きの状態ですが、さらにこれを深く掘り下げて見ますと、同じ年令、同じ性の牛については、資質のよい牛はより多く肉をつけて売った方が得ですし、資質の悪い牛には余計に肉を付けても、単価が高くないので、早目に売った方が得策です。

肥育牛の除角

日本農業新聞（9月28日）

和牛の飼育も多頭化してくると、突き合いをしたりする角がじゃまになってくる。角の先はするどくないようにみえるが、まともに突き合うと皮が切れるほどの怪我をして、増体にも影響してくる。そこで、肥育に入るまえにまえもって除角しておきたいものである。

その方法にはいろいろあるが、まず薬品で焼き切る方法が完全である。

子牛の角がでかけたとき、角の周囲にワセリンをぬって固めておいて、さらに目の中にくすりが入らないようにしてから、苛性ソーダまたは苛性カリを角の上のせて焼く。

つぎに、イージーカットといってゴム輪で切り取る方法がある。

これはきわめてかんたんなもので、やはり、子牛の角の付け根にゴム輪をかたくはめておくだけでよく、自然に角はかかれておちる。角がまだ固くかたまっていないうちに、つけ根をつよく締めつけられるため、角のなかに血がかよのを止められて角は次第に落ちることになる。

和牛の流産

日本農業新聞（10月23日）

春から夏にたねつけをした牛が流産をおこし易い時期になった。

伝染性流産は、バング菌と胎児孤菌によっておこるもので、なんの前兆もなく突然流産する。バング菌によ

岡山畜産便り 1964.10・11

る流産は妊娠7～8ヵ月、胎児孤菌によるものは5ヵ月くらいに多い。伝染性流産の胎児は身体の表面に赤い斑点があつてきたなく、後産も停滞しやすい。

これがでたときは牛体、牛房をよく消毒し、敷わらは焼きすて、胎児も焼くか消毒して地中深くうめる。さらに子宮洗浄をして少なくとも2ヵ月はたねつけをしない。

そのほかトリコモナス原虫が原因で流産をおこすこともある。妊娠3～4ヵ月におこし易く、うみを多くだす。この原虫は妊婦牛でなくても子宮や膣の炎症をおこして不妊の原因になることもある。手当てとしては消毒薬で子宮をよく洗う。

非伝染性流産は妊婦後半になって、使役したり、ころんだり、他の牛に腹を突かれたりして急におこす。いずれの場合も、流産したら必ず獣医にみせること。